

# 生活という言葉の甘いワナ

『医療は「生活」に出会えるか』

■日本医科大学・Dr.

竹内 孝仁

この書物のなかで、もっとも読んでほしかったところ、そこから想像してほしかったものは、例の仲居を口説いた元おむつ老人の話と、全員が役割をもったあとの風景である。

というのも、この書のもととなったメディカルトリビューンの連載を始めるにあたって、私には明確な2つの意図があったからである。

その1つは、いわゆる高齢者ケアの世界で既存の医学や看護学から出て「生活」に誘うことであり、そこからもう一度既存の理論を見つめ直すことだった。しかしこれはこれで大切なこととはいえ、そのあとに来るものにとってはほんの序曲程度に過ぎないと思っていた。

もう1つの意図、これこそが目指したものなのだが、生活というものの解明、とりわけこれに立ち合う私たちの位置といったものをいくらかでも書きこめればと望んだ点である。

というのも、生活という言葉のリハビリテーションや介護・看護の世界にもち込んだ初期の一人が私だと思うものの、当時すでにこの言葉を仕事や主張の核にした人たちが現れていて、しかしとんでもない誤解をしていると思える人が多かったからである。

問題を簡略に言えば、人は生きているかぎり生活している。だからそれへの関わりはその生活ぶりをどのようにしていこうとするかにあり、ときにはケアという概念が介入するのだが、その核心は相手への関わり方にあるといえる。

この関わり方だが、私は元来生活というのは真の意味でその人だけのものだと思っていて、徹底的に主体的で他の介入を許すようなものであってはならないと考えている。生活の主体に対する犯罪は、医学にせよ看護にせよそれらの理論での介入と囲いこみだ。同じことが生活という言葉の主張者に何ら反省なく認められることへの批判がこの書の核心である。

生活重視の具体的あり方として「生活感覚」からの発想が珍重される。だがよく見るとそこでいう生活感覚とは、周囲の人のそれである。何のことはない、まわりの生活感覚の押しつけであり無原則の囲いこみである。

私はケア関係の出版物で、老人を囲んで周囲がニコニコと笑っている写真が大嫌いだ。もしその人の生活への緊張感があるとしたら、本人の姿だけ写すくらいのセンスが欲しい。

仲居を口説いた老人の風景には、もはや介護職も誰もいない。ただ彼だけがこの世界の真中にいる。特養ホームで役割をもって生活しはじめた人の風景では、寮母たちの姿はかすんでいく。

この書物は、タイトルが示すように医療への発言を土台にはしているが、真の矛先はむしろ私も含めた「生活派」の人たちに向けている。